

目次

絶版殺人事件

5

訳者あとがき  
222

## 主要登場人物

- バジル・クルックス……………作家。『シンデレラの娘』の著者
- トランキル……………フランス人。引退した古文書管理人で、謎解きが趣味
- ジョージ・ロデリック卿……………アルデバラン号船長
- テンビー・オガル……………水夫
- ジェイムズ・バセット……………水夫
- ハンス・ファン・ハース……………機関士。オランダ人
- モーセ・エイントリー……………火夫。ユダヤ人
- トビー・グース……………コック
- ウロホ……………見習い水夫
- カール・ヒンメルブラウ……………ドイツ系アメリカ人の実業家
- ロール・ヒンメルブラウ……………ヒンメルブラウの妻。フランス出身
- ジョン・カウチ……………ダンバートンの開業医
- グレイロップ……………ダンバートン警察署長
- ビッグス……………警部
- トンブソン……………巡査
- バトラー……………巡査
- アーロン・E・K・ピルグリミッジ卿……………ハイランド地方ヘッドミルズの弁護士

絶版殺人事件

## 序章 二つの馬鹿げた悪戯

四月一日、正午過ぎ。男は初老で小柄、髭は生やしていない。材木に腰掛けて北の方向に耳をそばだてていたが、おもむろに立ち上がると、「灰色の上着の裾を丹念に払った。

「よし、時間だ」

耳を聳する轟音。蒸気機関車が姿を現す。車体は右に傾いている。

イギリスのベッドフォードとサフォーク州イプスウィッチを結ぶ急行は、一分だけ遅れていた。

列車は減速しながらニューマーケットの急カーブに近づく。この国の鉄道網でも屈指の難所だ。四キロメートルほど離れた駅の名がこのカーブにもついている。ここでは普通列車も急行列車も、時速十五キロメートルほどに減速せざるを得ない。

これから語る二つの出来事の少し前、まさにこのニューマーケット・カーブで、悲惨な事故があった。強い酒に目のない機関士が運転を誤ったのだ。それ以来、ニューマーケット・カーブは惨事の現場として名を馳せている。想像を絶する数の犠牲者を出したこの大事故は、新聞でも大きく報じられた。

そのため、巨大な機関車にブレーキがかけられて悲劇の舞台にさしかかると、流血の場に漂う陰鬱な雰囲気、心をそそられ、物見高い乗客が五十人ほど窓から顔を覗かせて惨状の痕跡を探すのだった。

しかし、事故をしのばせるものといえば、線路の両側にうず高く積まれた板切れと、あちらこちらに雑然と置かれたスコップとつるはしだけだ。数百メートル先には板張りの小屋があり、線路を補修する工夫たちが空きつ腹に昼食を詰め込んでいる。暖かい日だった。強い陽光が砂利に降り注ぎ、線路を照らす。野原はまどろんでいる。静寂を破つて、ホップ畑から一羽の鳥の鳴く声が妙にはつきりと聞こえた。

列車がやって来ると、小柄な男は窓から斜めに出された乗客の顔に皮肉っぽい眼差しを投げかけ、何人かの若い乗客は、反射的にからかいの言葉を男に浴びせた。男の目の前に、とうとう最後尾の車両が来た。窓から覗く顔はない。

すると、一人で突っ立っていた男は素早く二歩進み出て片腕を挙げ、コンパートメントの中へ向けて、長方形の物体を投げ込んだ。

ミス・ドロシア・ハイドポットは、とてつもなく長い一夜と退屈な半日を列車に揺られてきたせいで、見るからに疲れ果てていた。眠くなるのも無理はない。生まれ故郷のカンバーランド州カークブリッジからこの老嬢がはるばる旅しているのは、他でもない、甥っ子ジェイムズ・マクレガーの結婚式に参列するためだ。マルメロのゼリーやスモモのコンポートを夢見ながらとうとうとしていると、不意に何かが頭に当たって、飛び起きた。額から顎まで何度も手で撫でてみる。よかった！ 出血はなさそうだ。手のひらにも、細く長い指にも、血は一滴もついていない。ミス・ハイドポットはかんかんになって、たった一人の相客のほうを見た。十五歳ほどの若い娘が、まったく垢抜けない身なりで、青リンゴ色のブラウスに赤毛をたらし、目を丸くしてこちらを見ている。二人の間に面識はない。

「ちよつと、あなた、どうしてこんな無礼なことをなさるの？」

ミス・ハイドポットは膝の上から本を取り上げ、振りかざす。

「いいえ、お言葉を返すようですけど」。娘はいかにも心外そうな表情を大げさに作つて言う。「この本、あたしが投げたんじゃありません。その窓から入つてきたんです」

ミス・ハイドポットは窓からぐいと身を乗り出して野原を眺めたが、どんなに目を凝らしても、土手の上にも、隣の車両の扉にも、人影はない。あの小柄な男が見えるわけはなかった。本を放るや、急いで列車の後ろで線路を渡り、並行する北行きの列車の線路の脇に立つたからだ。老嬢は一瞬、空を見つめた。いったい、いつの間に空から本が降るようになったのだろう？ 列車は徐々にスピードを上げていく。やがて、白髪まじりの髪を風に乱されたので、ミス・ハイドポットは仕方なく座席へ腰を下ろした。手に持ったままだった本を目の前にかざす。

「それにしても不思議なこと」。老嬢は失つた声で、ありつたけの蔑みを込めて言った。「あなたがおっしゃるのは、これのことね！ これが、窓から飛んできたと！」

「そのとおりです。あたしは、眠っていませんでしたから。間違いありません」

「ええ、ええ、確かに、私はうとうととしていましたよ。つまり、あなたも存じないのね……誰がこのばかげた悪戯を仕掛けたのか？」

「見当もつきません」

「あなたは身動き一つなさらなかつたわね！ 窓へ駆け寄り、叫ぶべきでしたよ……。いいこと、あなたにぴったりの助言を一つ差し上げますから、できるだけ覚えておきなさい。『率先して行動せよ！』率先して行動しなくては、何事も成し遂げられません。この私ことドロシア・ハイドポット

は、常にそうしてまいりました」

若い娘は下を向いたまま、答えようとしない。おおかた、吹き出したいのを必死にこらえているのだろう。ミス・ドロシア・ハイドポットはすべてを自分に都合よく解釈し、青リンゴ色のブラウスを着た赤毛の娘には頭を巡らす間も与えなかつた。どうやら怒りは収まってきたらしい。

「さて、この本を飛んできた方向へ投げ返したらどうかしら？ あなた、どう思つて？ 私がこの本を読むとでも？ 題のみならず、中身まで？」そう言うと、ミス・ドロシア・ハイドポットは本を薄つぺらな胸の前まで持ち上げると、不意に好奇心に駆られて何ページかめくつた。「どうせつまらない作品でしょう……。やつぱり、思つたとおりだわ。ろくでもない小説……嘆かわしいこと！」甲高い叫び声が娘を驚かせる。「おお！ こんな陳腐なシロモノを書くほど天に見放された人間がこの世にいるなんて！」そして、乱暴に本を閉じて言つた。「どうぞ！ いかが？ 差し上げるわ。」娘は手を差し出す。

「あら！ お礼には及ばなくてよ。本当につまらない品ですもの」  
憤然と言ひ放ち、短気な老嬢はもつたいぶつて目を閉じた。

甘酸っぱい色に身を包んだ、燃えるような髪色の若い娘は、同乗者を激怒させた小ぶりの本を開く。最初のページにはこう書いてある。

### 「シンデレラの娘」

これが表題だ。続いて、聞いたこともない作者の名が記されている。バジル・クルックス。

次のページには、大きな活字でこう印刷されている。

偉大なる芸術家、アーサー・ラッカムに捧ぐ

しかし、この赤毛の田舎娘に、そんな表題や献辞がどれほどの意味を持っただろう？ 気の毒な娘は字が読めないのだ——本人は隠しているが。

(古物屋に売ればいいわ。ええと……いくら位になるかしら？)と娘は考える。

疾走する列車は小気味よく揺れながら時速九十キロでイプスウィッチへ向かう。乗客たちは列車がまったく動いていないかのような錯覚を抱く。機関車では、機関士が顔に流れる黒い汗を拭いながら、あと少して仕事が終わるぞと考えている。青リンゴ色のブラウスの娘は本を読む振りをし、ミス・ハイドポットは軽くいびきをかきながら眠っている。ケンブリッジへと北上する列車が轟音を立てて近づき、急行列車とすれ違うが、老嬢は目を覚ましもしない。

ケンブリッジ行きの列車に、太鼓腹の男が乗っていた。やがてニューマーケットのカーブに差しかかる時、男の目の前に、コンパートメントの窓から一通の手紙が舞い込んだ。あの初老の小男が車外から放り込んだのだ。コンパートメントの客はずんぐりした体格の冷静沈着な男だ。彼は自問した。

(おや、ディッキー。この手紙を拾うつもりかい?)

この男はコンパートメントを貸し切りにし、一人で占領していた。おそらく社交嫌いか、あるいは怠惰なたちなのだろう。

それでも身を屈めて手紙を拾い、眼鏡をかけ直す。封筒にはこんな宛名書きがある。

運命を切り拓きたい人へ

もったいぶった大きな書体で、すべて大文字で書かれており、人目を引こうという意図が一目瞭然だ。

(おいおい、ディッキー。そんな封筒を開きなさんな。それより葉巻でも吸ったらどうだい?)

だが、男はやはり蠟の封印を破った。

手紙を読み終え、しばし茫然とする。指が機械的に便箋を封筒へ戻す。

「馬鹿げた悪戯だね、まったく」とうとう声に出してそう言った。

男は手をほとんど動かもしもせず、指の力をわずかに弱めただけで、奇妙な手紙を窓の外へ放った。手紙はふわりと飛んでから、つむじ風に乗ってくるくる回り、最後に見事な滑空をして、とうとう人気がない白っぽい道に落ちた。

ニューマーケットが近づいてきた。機関車が汽笛を高らかに鳴らすと、小さな町が懐を開き、家々を素早く左右に退かせて、煙を吐く怪物の通り道をあけるかのように見える。

列車のはるか後方の野原を、フロックコートに灰色のゲートルという出で立ちの、あの小男が進んでいく。足取りは軽く、目には悪戯っぽい光をたたえ、唇には皮肉な笑みが浮かんでいる。時おり屈んでは華奢な指で茨の若枝を払ったり、ゲートルの内側に入り込んだ雑草を取り除いたりする。土く

れをよけて跳ぶ度に、背中でフロックコートの裾がはためく。男が目をつけた最初の木はブナだった。「ブナでも構わんさ！」

年齢に似合わぬ機敏さで最初の枝までよじ上ると、丈夫な綱をその枝に結びつけ、端に輪を作り、結び目が滑るようにした。男の口元に冷笑が浮かぶ。不意に葉がざわついた。小さな体が激しく三、四度揺れて、それから天と地の間で動かなくなり、ぶらりと垂れた。

第一部  
アルデバラン号の事件

## I 謎の士官

棧橋の上で、痩せこけて飢えた野良猫たちが魚の匂いにつられてうろついている。一人の男が誰かを見張っているらしく、高い標柱の陰にさつと身を隠し、手のひらで葉巻の火を覆い隠す。スコットランドのダンバートンの町は眠っている。静まり返った港の足元には鏡のようなクライド湾の海面が広がり、その上に幽霊じみた霧が漂う。クライストチャーチの大時計が十二時を打つ。まさにそのとき、柔らかなさざ波を立てて一隻のボートが闇から現れた。闇の中で、錨を下ろした船のシルエツトが揺らめく。ボートに乗っているのは船乗りだ。金属のボタンがついた青い上着を着て、遠洋航海船の船長用の白いズボンを穿いている。帽子のひさが光る。オールさばきは慎重で、オールの先は麻袋で覆われている。棧橋に着いたときにわずかな音も立てないよう用心しているらしい。

港の棧橋に設えられた係留用の環にボートをつなぐと、男は勢いよく陸に上がり、暗い通りを進む。あらゆる動作が、素早く音を立てずに行なわれた。

葉巻の男は標柱から標柱へ、戸口から戸口へ移動しながら、船員の後ろをつけていく。

メインストリートのクイーンズ・ロードを過ぎると、路地はダンバートンの極貧地区へ通じる。場末の東区は娼婦や船乗りのたまり場で、下等な売春宿やいかわしい安酒場のある一画だ。街灯はいよいよ少なく、建物の壁はいよいよ汚い。士官（上級船員）の服を着た男はうさん臭い通りの風景に

は目もくれず、足早に歩いていく。時おり、後ろを振り返る。追跡者は一度ならず、見つかったかと思つてひやりとした。だが、杞憂だった。通りはブラックスター（黒星）・スクエアという広場に突き当たる。名前の由来は一見してわかる。広場が五芒星の形をしていて、真昼でも暗いからだ。広場に至る五本の通りのうち一本は、なんとミルキー・ウェイ（銀河）という名だ。その通りに、男は迷わず入っていく。辺りにはもはや石造りの建物も、飾り鋸を打った背の高い扉もない。二本足で立つのがやつとの狭い歩道があるだけだ。士官が一軒の小屋に吸い込まれるように入つていたので、ここまで執拗に追跡してきた男は、はたと困った。小屋は不揃いの板で建てられ、窓はない。二階に一つだけある丸窓には赤い布が掛かっている。ただ、板と板の間は隙間だらけで、隙間から難なく中を覗くことができた。

店内は騒がしい。遊び人の船乗り、泥棒、ごろつきといった連中が皆、カード遊びやポーカーダイス賭博をしながら、大きなカップでエールかジンを飲み、商売女を片手で抱き寄せている。ダンバートンきつてのやくざや無法者が集まっている。士官もそこにいた。背中が見える。四人のならず者とテーブルを囲み、話し込んでいる。追跡者は顔を上げ、鉄製の悪趣味な看板が風にあおられてきしんでいるのを眺めた。表側に大きく描かれているのは、乳房がはち切れんばかりに膨らんだ雌牛。裏側には英語の「スラング（俗語）」でこう書かれている。

乳牛愛好家御用達（「Milk Cow」（乳牛）には俗語で「金のなる木」の意がある）

追跡者は来た道を引き返した。

一時間後、士官が再び棧橋に姿を見せた。ボートに飛び乗り、素早く漕ぎ出す。ボートが音もなく横付けしたクルーザーは、棧橋から百メートルほどの所に停泊している。目を凝らせば、その名が読み取れる——「アルデバラン号」（「アルデバラン」はおうし座で最も明るい恒星の名）

灰色のフロックコートとゲートルを身に着けた初老の小柄な紳士が、ベッドフォードとイプスウィッチを結ぶ急行に本と手紙を投げ込んでから、三年が経とうとしていた。

あの二つの奇妙な贈り物は、どうなったのだろうか？ 無名の小説は、どこかの古物商に売られ、買われて、また売られたのだろうか？ コンパートメントに一人で座っていた乗客が拾った手紙は、どうなったのだろうか？

〔著者〕

ピエール・ヴェリー

フランス、シャラント県ベロン生まれ。24歳の時、友人とパリで古書店を開く。雑誌の編集などに携わりながら執筆活動を続け、1929年、「Pont-Egaré」で作家デビュー。30年『絶版殺人事件』で、第一回フランス冒険小説大賞を受賞。

〔訳者〕

佐藤絵里（さとう・えり）

東京外国語大学外国語学部フランス語学科卒業。英語、フランス語の翻訳を手がける。訳書に『最新 世界情勢地図』（デイスカヴァー・トゥエンティワン）、『紺碧海岸のメグレ』（論創社）、『フォトグラフィー 世界の香水：神話になった65の名作』（原書房）、『シリアル・キラーズ・クラブ』（柏艸舎）など。

ぜっばんきつじん じけん  
絶版殺人事件

——論創海外ミステリ 227

---

2019年2月20日 初版第1刷印刷

2019年2月28日 初版第1刷発行

著者 ピエール・ヴェリー

訳者 佐藤絵里

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル  
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266  
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

---

ISBN978-4-8460-1797-2

落丁・乱丁本はお取り替えいたします